

軍事動向等を踏まえた各種対応を行うため、情報の収集・処理体制及び収集した情報の分析・共有体制を強化します。

第八に、アジア太平洋地域の安定化及びグローバルな安全保障環境の改善です。

アジア太平洋地域の安定化に向け、二国間、多国間の協力関係を強化し、訓練、演習等の各種活動を適時適切に実施するとともに、グローバルな安全保障上の諸課題に適切に対応するため、国際平和協力活動等をより積極的に実施いたします。

これをもちまして、平成三十年度の防衛省関係予算の概要の説明を終わります。

三宅委員長を始め委員各位の慎重なる御審議をよろしくお願いいたします。

委員長（三宅伸吾君） 以上で説明の聴取は終わりました。

この際、お諮りいたします。  
外務省及び防衛省関係予算の主要説明につきまして、いずれもこれを省略して、本日の会議録の末尾に掲載することにいたしたいと存じますが、御異議ございませんか。

「異議なし」と呼ぶ者あり」

委員長（三宅伸吾君） 御異議ないと認め、さよ取り計らいます。

これより質疑に入ります。

質疑のある方は順次御発言願います。

中西哲君 自民党の中西哲でございます。防衛省に来年度予算の件について質問いたします。

まず最初に、F35戦闘機に搭載する相手の脅威圏外から対処できるスタンドオフミサイルとしてJSMを取得し、また、F35等へ搭載するための改修を行うべく、同じくJASSM、LRASMスタンドオフミサイルを調査、購入する経費として二十二億円が計上されておりますが、このミサイルはどついう構想の下に購入するのかについて、防衛政策局長にお伺いいたします。

政府参考人（前田哲君） お答えいたします。

御指摘のスタンドオフミサイルでございますが、一層厳しさを増す安全保障環境を踏まえ、諸外国の航空能力の進展が著しい中で、我が国防衛に当たる自衛隊機が相手の脅威の圏外から対処できるようになることで、隊員の安全を確保しつつ、我が国を有効に防衛するため導入をするものでございます。

この諸外国における軍事技術の著しい進展等によりまして、具体的に申し上げますと、海上部隊あるいは航空部隊による連携した武力攻撃が行われる場合に、その脅威が及び範囲は侵襲してくる部隊の周囲数百キロ以上に及び得る状況となっております。そして、現状では、自衛隊の航空機は相手の脅威の及び範囲内に入って対応せざるを得

ません。

このような中、隊員の安全を確保しつつ侵襲部隊に対処するには、相手の脅威の圏外から発射可能なスタンドオフミサイルが不可欠であるというふうに認識をしているわけでございます。

また、あえて申しますと、BMDイージス艦、これ、BMDの任務で日本海等々に展開をするときでございますが、これに対する新たな脅威として、長射程の対艦ミサイルを搭載した艦艇、こついつたものも考えられます。イージス艦はBMD任務に集中している場合に自己防護能力が低下をしますので、イージス艦が相手方の対艦ミサイルの射程に入る前に速やかに対処する必要があります。その際、相手は対艦ミサイル搭載艦艇とともに護衛のための戦闘機を運用することも考えられますが、このような戦闘機の脅威がある中で隊員の安全を確保しつつ相手の艦艇に対処するためにも、相手の脅威の圏外から発射可能なスタンドオフミサイルは欠かせないと考えております。

スタンドオフミサイルについては、今申し上げたような導入目的に沿って運用することを想定してございます。

中西哲君 今、航空自衛隊にはF35戦闘機、そしてF2戦闘機があり、今、F35が一機この間入り、今年中に十機程度購入されるという計画でございます。

自衛隊では、飛行機から艦船攻撃の役目は主にF2戦闘機が担っておりまして、現在も、九十機弱ですが、ASM2という対艦ミサイルを装備できるといふことでございます。そしてまたF55もF2も、そしてまたF55も、全て対艦攻撃ができる戦闘機にしようという構想ですが、政府参考人（西田安範君） お答え申し上げます。

お尋ねのありましたますF35Aでございますけれども、空対空戦闘のほか対地攻撃や対艦攻撃も行うことのできるマルチロール機であると認識をしております。

こうしたマルチに高い能力を持ちますF35の開発も踏まえまして、一般論として申し上げます、あらゆる事態への対処の前提となる航空優勢の確保という観点からは空対空の戦闘能力がまずは重要であると考えますけれども、特定の戦闘機を空のみに使用し、他の戦闘機を対地、対艦に使用するといった区分からはだんだん変わってきているものというふうにご考えております。

防衛省といたしましては、F35Aについては、このような特性も踏まえまして、対空戦闘のみならず対艦、対地にも使用していく考えでございます。実際に、これまでも、F35Aに搭載可能な空対空ミサイル、あるいは空対地爆弾の取得も進めてきており、また、今般予算案に計上いたしました

たJSMの取得を進めることによって対艦能力も得られることとなります。

また、F55につきましては、委員御指摘のとおり、主として空対空戦闘に用いることを念頭に導入をしたものでございます。他方、私どももいたしましては、F55についても、限られた航空戦力を有効に活用する観点から、F35よりも搭載可能兵装量が大きいという特性を生かしまして、今後は、空対空戦闘のみならず対地攻撃や対艦攻撃にも用いることを考えています。

こうしたことを踏まえまして、今般、JASSMやLRASMの導入についても検討しているというところでございます。

中西哲君 このJSMミサイル、ノルウェー製でございますが、何でアメリカ製じゃなくてノルウェーが開発したと、その理由について把握しておりますか。

政府参考人（前田哲君） お答えいたします。

JSMにつきましては、委員御指摘のとおり、F35A、これはF35の空軍タイプ、それからF35C、海軍タイプであります。この機体に内装可能なものとしてノルウェーが、これはオーストラリアと共同で開発しているスタンドオフミサイルでございます。アメリカのレイセオン社も開発に携わっているほか、米軍機に搭載して発射試験を行うなど、米軍もJSMの開発には協力をした

いるものというふうにご承知しております。

他方、対艦攻撃用として米軍が独自に開発したF35に内装可能なミサイル、これは現在はないものと承知をしております。

この理由につきましては、米軍内の運用構想等に関わることでありまして、確たることは申し上げられませんが、何点が指摘するすれば、米軍においては、対艦攻撃を行うのは空軍よりも主として海軍と構想されていることであるとか、海軍が行う空対艦攻撃は空母艦載機が実施するというところで、その主体は、委員御存じのとおりスーパーホーネットが担っていると、こういったことが背景にあるのではないかとこのように考えております。

中西哲君 今答弁にあったとおり、アメリカはアメリカ空軍のF35Aには対艦攻撃をさせるという構想はなかったんですね、多分、今のところ。それで、おっしゃるとおり、艦載機F35C、これも載せるかどうか分からない、専ら対艦攻撃はスーパーホーネットがやると。F35Aもマルチファイターですけども、F35CもスーパーホーネットがもうEタイプ、Fタイプになってマルチファイターと言われており、役割分担をやっておるわけですね。F35AもCもBもすばらしい戦闘機ではありますけれども、私は、まずそのステルス性、そしてまた共同交戦能力、CEC、先端に行つて、E

2D早期警戒機なんかと協力し合って相手の位置を探る、そして後方にある艦船から攻撃するという、そういうすばらしい能力を持っているわけですよ。

しかも、日本の今のF2戦闘機に載せてあるASM2ミサイル、非常にこれも優秀な戦闘機であり、かつミサイルであると思っておりますが、このASM2ですけれども、このミサイルについて、その性能、できる範囲で結構ですが、そしてまた、本年一月にこの新しいタイプ、ASM3が開発されましたが、その差について説明していただけますか。

政府参考人（西田安範君） お答えを申し上げます。

ASM2は、戦闘機F2に搭載をすることができる空対艦ミサイルでございます。ASM2の射程、速度といった性能につきましてはお答えを差し控えさせていただきますが、ASM2は、海面近くを亜音速で飛翔し、パッシブセンサーで敵艦艇を探知した上で攻撃を行うものでございます。一方、ASM3につきましては、近年、諸外国の艦艇が対空火器を高性能化するといった状況に対応し得るように開発を進めてきた対艦ミサイルで、委員御指摘のとおり、先般開発を完了したところであります。

ASM2と同様、具体的な性能につきましては

差し控えさせていただきますが、射程についてはASM2と同程度であるものの、飛翔速度は超音速となっております。また、パッシブセンサーのほかアクティブセンサーも保持をしているところでございます。

中西哲君 私、軍事雑誌なんかを見ると、推測ですけれども、非常にASM3というのは優秀なミサイルであるという情報が書かれてあります。そして、日本の技術を持ってすれば、この今言った射程距離、射程距離を延ばすことはそんなに難しいことじゃないんじゃないかという話も聞かえてきます。ですから、もうちょっと日本の技術を伸ばすと。そんなに急いで、JSMあるいはJASSM、LRASMというミサイルを何でこんなに急ぐかなという思いがあるから聞いておるんです。

そしてまた、F5a戦闘機等に積むという話でこの二種類のミサイルがありますが、F5aは百二機が近代化改修が行われております。今年、我々、二月に沖縄に、空軍基地に行ったときに、近代化改修終わっているF5a、これに搭載のコンピュータは日本でいうスーパーファミコン程度ですという話がありました。アメリカも同じように、日本と同じタイプ、F5aとDタイプ、これ改修を行っております。搭載コンピュータ、同じですか。

政府参考人（西田安範君） お答え申し上げます。

航空自衛隊のF5a戦闘機のうち近代化改修を施した機体については、セントラルコンピュータはVCCと呼ばれるものが搭載をされてございます。

一方で、自衛隊のF5bと類似する任務を持つとされます米空軍のF5cには、VCCをアップグレードしましたVCCプラスと呼ばれるコンピュータが搭載をされておまして、空自の近代化機と比較しますと処理速度が一定程度向上しておるものと承知をしております。これによりまして、処理速度が高くなりますと、状況認識能力、これが高く保つことができるというふうに認識をしております。

中西哲君 F5aについてはライセンス生産ですので、FMSじゃないので、もうちょっと日本で開発したり何だりを、まあアメリカと話しながらですけれども、やれるんじゃないかという思いがあります。

それで、九十九機、残りの、について今後どうするのかという話で、私、この話が最初出たときに、対艦ミサイルを積めるようにするのかなど。F5aについては、Eタイプというのがいわゆる昔の戦闘爆撃機ですよね。ただ、これ、F5bのAタイプ、Bタイプ、Cタイプ、Dタイプ、これ

とは全く違う飛行機ですからね、形は似ていますが、六〇%を再設計し、強度を上げて、ミサイルやら爆弾、そして燃料の搭載能力約十一トンと言われておりますよ。第二次大戦中のB26の爆弾搭載力が九トンですよ。それよりはるかに大きい能力をこのF35のEタイプは持っているんです。それにこの二つのミサイルは積めるようなんですが、それと同じように改修するような目的なんですかね、それとも実験ということですか、お答えください。

政府参考人(西田安範君) お尋ねのありました近代化改修に適さないF35戦闘機の取扱いでございますが、これにつきましては、現在の中期防におきましては、能力の高い戦闘機に代替するための検討を行い、必要な措置を講じるということとさせていただきます。

これを踏まえて関係部局連携して検討を進めているところでございますが、現在のところ、この近代化改修に適さないF35の今後の取扱いにつきましては、現時点で決定をしていないということとさせていただきます。

中西哲君 今までお聞きしましたのは、防衛予算の中でFMS調達価格が、割合が物すごく増えているんですね。それによって部品の調達とか整備にしわ寄せが来ておるんですね、航空自衛隊だけじゃないんですか。

特に航空自衛隊は、F35Aの購入価格がどんと上がっていますので、もうはしょって質問しますが、平成二十八年度で四千八百八十一億という資料があります、FMS調達が。三十年度予算は、このF35Aの購入価格だけで、いろんな経費も含めて二千億ですよ。ぼんと跳ね上がっていらっしゃるわけですよ。一体、十年後、二十年後にこれがどうなるとお考えなのか、お答えください。

政府参考人(西田安範君) お尋ねのFMS調達についてでございます。FMS調達につきましては、御指摘のとおり、このところ、FMS調達による金額が増えてきているのは事実でございます。平成三十年度予算では、FMSによります調達が予算総額で約四百億程度というふうになってございます。

お尋ねの今後の見通しでございますけれども、現時点で来年度以降の予算に計上する装備品について決定しておるわけではございませんので、こうした装備品の調達につきましては、今後五年間の具体的な防衛装備品の購入計画でありますところの、本年末までに策定をします次期中期防の検討の中で決定をしていくものでございますから、これから先の見通しが具体的にどうなっていくかということにつきましては、恐縮でございますが、現時点でお答えすることは困難でございます。

中西哲君 国内の自衛隊の航空機に関わるいろ

んな会社が約千四百社と言われております。それで、FMS調達が増えるに従ってその会社なんかの出番がなくなってくるし、いい技術は持っている評価されているんですね。

ですから、私は、このFMS調達、できればもっと日本の国産品を使うと、それは、飛行機に限らずミサイルもそうなんですが、そして、次のF2戦闘機に代わる次期戦闘機、国内開発か国際共同開発か、又は既存機の能力向上にするのかというところで、今年半ばくらいまでに結論を出さなきゃいけないんですが、是非、国際共同開発、日本が入って主導権を握って開発できるという、そういう体制をつくっていただきたいと思っております。

次の質問に移りまして、イージス・アショアの整備計画が約七億円入っております、基本設計、地質測量調査等についてということとさせていただきます。

私は、一年でも早くこのイージス・アショアの整備を完成させて、今弾道ミサイル防衛に就いている海上自衛隊の護衛艦、この護衛艦を本来の日本の周辺の海上防衛に充てるという思いでありまして、今どの程度の進み方というんですかね、現状についてお聞きします。

国務大臣(小野寺五典君) 現在、防衛省・自衛隊として引き続き高度の警戒態勢を維持し、イ

ービス艦を展開しておりますが、整備、補給で港に戻る隙間の期間が避けられず、また、洋上勤務が繰り返される乗組員の勤務環境なども厳しい状況にあります。イービス艦は、弾道ミサイル防衛の任務のみならず、護衛艦隊全体の艦隊防空の任務や平素の警戒監視など、様々な任務を行うことができる我が国防衛上極めて重要なアセットであります。

イービス・アシヨア二基を導入すれば、我が国を二十四時間二百六十五日、国民の生命、財産を守り続ける能力を抜本的に向上させることができるほか、洋上勤務が繰り返されるイービス艦乗組員の負担が軽減され、イービス艦を平素の警戒監視などのBMD以外の様々な任務に一層活用することができるようになり、ひいては、我が国全体の抑止力の向上になることとなります。

イービス・アシヨアの導入については一定期間が必要となりますが、米側の協力を得ながら、最速のスケジュールで導入できるよう必要な取組を行ってまいります。

中西哲君 それで、このイービス・アシヨア、陸上自衛隊が運用するということになっておるんですが、陸上自衛隊には運用実績がございません。海上自衛隊には運用実績、イービス艦がありますので運用実績があつて、しかも、この陸上のイービス・アシヨアは少々年齢が高くてその操作な

んかに従事できるという思いで、海上自衛隊でイービス艦に乗ってこの運用実績のあるOBを新たに再雇用してはどうかと思うんですが、いかがでしょうか。

国務大臣（小野寺五典君） イービス・アシヨアは、BMD対応型イービス艦と同様のレーダー、指揮通信システム、迎撃ミサイル発射機などで構成されるミサイル防衛システムを陸上に配備した装備品であり、大気圏外の宇宙空間を飛翔する弾道ミサイルを地上から迎撃する能力を有しております。言わば、海上自衛隊のイービス艦の船体以外の部分をそのまま陸上に固定的に置いたような装備品であります。

イービス・アシヨアを管理運用するノウハウや人員については、さきに述べたような特性から、イービス艦の整備体制や教育体制を活用することが可能であり、必要となる人員を育成しつつ、イービス・アシヨアを適切に運用できるものと考えております。

イービス・アシヨアを運営する部隊等については今後具体的に検討することとしており、現時点で海自OBの再雇用を行う考えがあるわけではありませんが、いずれにしましても、海自でこれまで蓄積されてきたイービスシステムの運用に関するノウハウ等も有効に活用できる体制を構築してまいりたいと思っております。

中西哲君 まとめます。

このイービス・アシヨア、今、SM3ブロックA、弾道ミサイル対処ですね、そのほかにも、対空ミサイル対処のSM2、そして巡航ミサイル対処のSM6、また近接防衛用のESSMもアメリカ海軍では使われておりまして、是非いろんな形のミサイルを活用できるように私は提案しまして、質問を終わります。

ありがとうございます。

佐藤啓君 自由民主党の佐藤啓でございます。

質問の機会をいただきまして、委員長、また理事各位、また関係の皆様には感謝を申し上げます。ありがとうございます。

早速ですけれども、まず、外務省の予算に関して質問をさせていただきます。

外務省の予算にしましては近年充実の方向にありまして、このことは大変歓迎すべきことであると感じております。一方で、どのような政策また予算に関しても、時代に合わないもの、そしてまた合理性を失ったものというのは不断の見直しをしていただく必要があるのかなと、そんなふうに感じているところであります。

本年の一月九日でありますけれども、河野外務大臣は、外務省職員に向けた新年の挨拶において、明らかにこれは合理的ではないよねというもののリストを作って、おかしいものは直していく、そ